

## 境港における「海の道」を活用した経済交流と自治体協力

境港管理組合港湾管理委員会事務局長

吉川寿明

境港は日本海に面した鳥取県と島根県に跨る重要港湾である。境港は、神戸税関管内では神戸港に次ぎ古い1896年に開港し、当時は大連や釜山などと定期航路で結ばれていた。この地域は、古代から対岸諸国との交易が盛んであり、弥生時代の集落跡である妻木晩田遺跡などその交流の事実を物語る遺跡や史跡が多数存在する。日本の黎明期を支えた交流の玄関口であった。

1989年に境港と東南アジアを結ぶ初めての定期コンテナ航路が就航、95年には中国、韓国とを結ぶ航路も相次ぎ就航した。境港の背後圏は、日本海側でも有数の人口60万人を擁し、歴史、文化、自然、食、スポーツ、温泉などを満喫できる多様な観光地に恵まれている。2009年6月には境港、東海、ウラジオストクを結ぶ我が国唯一の日韓露定期フェリー航路が就航し安定運航を継続している。毎週1回、ウラジオストクまで2日で結び、定時制、リードタイム、バルク貨物輸送に優位性を有する。主に自動車部品や建築資材などを輸出し、水産物などを輸入している。鳥取県では、ロシア沿海地方との友好交流協定の締結、GTI（国連の広域圏們江開発計画）と連携した中露国境経由の海陸複合一貫輸送の検証、日露政府間の経済協力プランに連動した官民連携プラットフォームの設置などを推進し経済交流の促進と航路の活性化に努めている。2017年4月には就航以来の境港の乗下船客数は20万人を突破した。環日本海定期フェリー航路の開設は、韓国船社のベンチャー精神と日韓自治体間の相互信頼及び協調支援が融合し実現したと言える。境港の2017年のクルーズ客船の寄港回数は前年比約2倍の61回、旅客数は6.7万人となりいずれも過去最高を記録した。欧米人を中心とする小型ラグジュアリー船から定員4千人を超える超大型カジュアル船まで様々なクルーズ客船が寄港する。境港が寄港を増やしてきた要因は、アジア・クルーズ・ターミナル協会（ACTA）に加盟したこと、韓国、中国に地理的に近いこと、大型船が着岸するバースを有していること、日本海側港湾と連携したクルーズツアー誘致を行ってきたことなどがあげられる。定期航路やクルーズ船の寄港など「海の道」は、新たな人やモノの流れを生み出し、地域の交通や物流の環境を一変させる可能性をもっている。日本海に面した地域は交通や物流において共通の課題を抱えている。この課題解決のためには、国内外を問わず自治体間の連携や協力を深化しながら、民間の経済活動に伴走支援していくことが肝要と考える。日本海が交流、交易の海になれば北東アジア地域の潜在力を引き出すことができる。